広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

先端技術と伝統工芸を融合させた美しき「現代の青銅器」

尾崎 迅（はやて） 富山／鋳金作家・研磨職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。富山県選出の匠、尾崎迅さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月24日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

作品をプレゼンする尾崎さん

銅器の「永遠性」に着目したプロダクト

「このプロジェクトにずっと参加したいと思っていた」と語るのは、高岡銅器の産地である高岡市で鋳金作家、研磨職人として活動する尾崎さん。鋳金との出会いは、大学時代。大阪出身の尾崎さんは金沢美術工芸大学で鋳金を学び、オブジェなどを制作。その魅力は感じていたが「鋳金作家として食べていくことは難しい」と卒業後は大阪へ帰り、自転車製造などの仕事に就く。しかし、「金属で、作家性のある造形的な作品を作りたい」という思いは消えることはなかった。

そんな時、高岡で鋳物業を営む大学時代の恩師から声がかかり、金属にヤスリをかける研磨作業を手伝うことに。そこから、高岡で鋳物製造に携わる日々が始まった。

工房にほど近い山町筋の街並み

研磨職人としてのスキルを磨きつつ、鋳金作家として表現する場も持ちたいと高岡市内にアトリエを構えた尾崎さん。「金属は扱いにくく、イメージ通りに形を作ることが難しい素材。その点、鋳金は型に金属を流し込めば自由な造形ができる。自分が求める表現ができるのは、やはり鋳金だと思った」。水を得た魚のように、洗練されたデザインのオブジェや花瓶、アクセサリーなどを精力的に造ってきた尾崎さん。今回のプロジェクトでは、高岡銅器の伝統技法をベースにしながらも、これまで手がけたことのない、新たな技術や表現を取り入れたプロダクトに挑んだ。

尾崎さんの作業風景

エリア・コンサルティングにて

プロダクトは、計8点の小さな蓋物。それぞれ「夜盗（ヨトウ）」「常世（トコヨ）」「星霜（セイソウ）」「苔清水（コケシミズ）」と名付けられた、自然の情景や生物をモチーフに造られた美しきプロダクトだ。有機的な形状や生き物がうごめいているようなテクスチャーがどこか妖しさも感じさせる。

作品コンセプトは、「現代の青銅器」。「青銅は、何千年も前のものが形状を留めたまま出土する、永遠性のある素材。そこに移ろいゆく自然の表情を留めることで、後世にまで残したいカタチの記録装置にしたかった」。古代の青銅器のように、永遠性を持たせたい。尾崎さんの銅器への情熱、畏敬の念が伝わってくるコンセプトだ。間近で見ると、テクスチャーの細密さには驚かされる。「明治期の日本は、輸出産業として『超絶技巧』と呼ばれる精緻な技巧が施された工芸作品が作られていた。それらの作品へのオマージュであり、そこを超えたい気持ちも込めた」。

細密なテクスチャーは、先端技術を取り入れることによって実現した。「以前、高岡のあるプロジェクトで、建築系プログラマーの堀川淳一郎氏と出会い、Houdini（フーディニ）という3DCGソフトの存在を知った。プロダクト原型の造形は、その3DCGソフトで作っている」と尾崎さん。

プロダクトのひとつ「苔清水」を例に挙げれば、まずは尾崎さんが描いた苔の葉をコンピュータに取り込みHoudiniを使って色や配列などを決め、3Dプリンタでシリコン製の原型を作る。その原型から型取りしたものに熔解した金属を流し込み、冷却した鋳物を取り出し表面を仕上げていく。先端技術で鋳物の原型を作るというのは尾崎さんにとって初めての挑戦だった。

「3DCGソフトのおかげで、リアルなテクスチャーを具現化できた。以前からこのような表現をやってみたかった」と尾崎さん。さらに制作過程では、さまざまなファクトリーとの協働が実現した。「今回、私はデザイン考案とディレクションがメイン。もともと高岡銅器は分業で作られるが、こんなにも多くの方に実作業を任せたのは初めて」。鋳造は黒谷美術、着色は色政とモメンタムファクトリーOriiといずれも地元で高い技術を誇るファクトリーが携わった。「特に着色が難しくて調整を繰り返したが、ファクトリーの方も面白がって関わってくれた。アイデアも出していただき、発見がたくさんあった」。

尾崎さんの作業風景

先端技術を使った高岡銅器に手応え

下川氏からのアドバイスも、プロダクトに反映させた。「テクスチャーがよく見えるようにサイズを少し大きくした。価格については、上代で8万円以下に抑えるべきと言われ、そこもぎりぎり守った」。多くの人の協力や助言を得て完成したプロダクトに、「感動している。制作過程も新鮮だった」と笑顔を見せる尾崎さん。商談会では、「表現が繊細で美しい」など高い技術力を評価するバイヤーの姿が多く見られた。

「新しい挑戦と、発信力を高めるためにこのプロジェクトに参加した。高岡銅器の魅力を後世に伝えていくため、発信力は大きな課題。今後は、海外の方にどう伝わるかも見てみたい」と展望を語る尾崎さん。プロダクトに手応えを感じ、この技法でさらなる展開をさせていきたいという。プロジェクトを通じて、新しいステージへと進み、高岡の伝統産業に新風を吹き込む尾崎さんの挑戦は、世界を視野にさらなる加速を見せるだろう。

完成プロダクト「夜盗」「常世」「星霜」「苔清水」

尾崎 迅
富山／鋳金作家・研磨職人

1982年生まれ。金沢美術工芸大学で鋳物を専攻し、2009年より鋳造メーカーに勤務。2014年に独立して作品制作と研磨職人を両立している。鋳物の質感にこだわりを持ち、研磨に特化した制作を手がける。鋳物製造の知識を生かしデザイナーとしても活動。銅合金のもつ抗菌作用を生かした花器や素材の永年性に着目した作品を制作している。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT

Ozaki Hayate Design Exhibition

期間：4月13日(土)～28日(日)
会場：レクサス富山
（富山市田中町 5-2-6）

今回発表の「苔清水」をはじめ、尾崎迅さんの作品を展示。
詳細はレクサス富山まで。